

「親密な」親子関係の裏側

——親子関係の在り方が子どもの
自己否定感・将来意識に与える影響——

佐藤 昭宏 (Benesse 教育研究開発センター研究員)

◆ 要約

- ◎親子関係の在り方（本稿では親子の意思決定の在り方に着目）によって、子どもの自己否定感や将来に対する安定志向は異なる。
- ◎学力が高い子どもほど、「自分はダメな人間だと思う」と思う感情（＝自己否定感）は低く、「多少つまらなくてもおだやかな一生を送りたい」と考える志向（＝将来に対する安定志向）は弱い。親子の意思決定において、自分の意見よりも親の意見を優先する相手優先型や保護者優先型の子どもにおいては、自己否定感が高く、また将来に対する安定志向が強くなる傾向がみられた。
- ◎学力や経済階層の影響を統制しても、相手優先型や保護者優先型の意思決定のあり方が自己否定感や将来に対する安定志向に与える影響は残る。

1 問題設定

本稿の目的は、思春期の親子関係の在り方が、子どもの自己否定感や将来意識にどのように影響しているかを明らかにすることである。

近年、「友だち親子」に代表されるように親子関係が親密になっているとの指摘がある。

2009年にBenesse教育研究開発センターが行った「第2回子ども生活実態基本調査」では、小6生から中2生において、親子の会話量や肯定的なかかわりが2004年より増加し、親子の距離がより近くなっている傾向が確認された。また2010年に公開された文部科学省の「全国学力・学習状況調査」（小6生と中3生を対象）の結果においても、「家の人と学校での出来事について話をしている」や「携帯電話の使い方について、家の人と約束したことを守っている」といった項目で2009年よりポイントが上昇しており、「ものわかりのいい」素直な子どもが増加している様子が見える。

かがえる。

しかし元来、小学校高学年から中学生という年齢は、第二性徴が始まる思春期にあたり、程度にこそ差はあれ、子どもが自我の形成や自立のために親の価値観や生き方から距離をとりはじめる——反発や抵抗を示し始める——時期とされてきた。しかし近年の調査結果を見る限り、その傾向は薄れているように見える。

親子関係は本当に親密になっているのだろうか。否、一見親密になっているようにみえるだけで、実際はその裏側で子どもや親がそれぞれの本音を隠し、相手に合わせて接しているのだろうか。

心理学者のCarter & McGoldrick (1999) は、思春期の子どもの自立にとって「他者配慮と自己配慮の均衡をとること」「社会や親や仲間からの期待と圧力の中で自分に対して誠実な意見や気持ちを発し続けること」の必要性を指摘する。もし、近年の親密な親子関

係が、自分の本音を隠し、相手に合わせることを優先することで成り立っているとするならば、子どもは自分自身の意見や気持ちを親に対して素直に発する機会を持たずに、精神的ストレスを抱えているかもしれない。あるいは心の奥底では反発心を持ちながら、その感情を表現できず、親の意見や気持ちを優先してしまう自分に対して無力感や不全感を感じているかもしれない。

このような表面化しない鬱屈した心情や葛藤をふまえて思春期の親子関係を論じるためには、単に親子の会話量や内容だけでなく、そこで交わされる会話や内容がどのような親子関係の上に出現しているのかを分析していく必要があるだろう。

そこで本稿では、親子関係が表れる1つの状況として、思春期の子どもとその親の意思決定に着目し、親子の意思決定の在り方によって、子どもの自己否定感や将来意識にどのような違いがあるか明らかにし、「親密な親子関係」の裏側を探る。

2 先行研究のレビュー

親子関係が子どもの自己否定感や将来意識に与える影響については、特に心理学や社会学の領域において数多くの研究蓄積がみられる。

例えば、根本(2007)は、自分に価値がないという感覚(=自己否定感)をもたらす主な養育環境の1つに、親子関係を取り上げ、親の期待や意向に応えるために、自分を抑え「よい子」でありつづけてきた子どもが、次第に「よい子」としての自分から離れられず、自分自身を生きられなくなっていくと指摘する。

「幼稚園や小学校は良い成績をとることは、親の喜ばせる手段でしたが、中学、高校になると、これが内面化され、自分の目標になってしまいます。このため勉強がちっともおもしろいと感じられないのに、良い成績をとることにこだわるようになります。親に受け入れてもらうために自分を抑えて

「よい子」でいたことが、やがて自己目的化し、「よい子」としての自分から離れられなくなってしまうのです。」(根本 2007:128)

そして努力は次第につらさになり、達成感も得られないことから、自分自身の存在価値を見失っていくと述べる。しかし根本(2007)の研究の中では、実際に自分の意見を抑制し、親の意見を優先している子どもでも自己否定感が高い結果を裏付ける量的なデータは示されていない。

自立や将来展望に関するテーマで量的調査を用いている研究としては、幼児期の子育て調査の結果と精神科医としての診察経験をふまえながら、親主導の管理・支配的な子育ての下で育ち、親の自己実現につきあってきた「よい子」ほど、思春期に差しかかって自分のしたいことや将来像を定めることができず、行き詰まる傾向があると指摘した原田(2008)や、子どもを対象としたBenesse教育研究開発センターの「第2回子ども生活実態基本調査」の結果から、仲よし親子のコミュニケーションの特徴として、親が子どもに対して自由や自主性を与える一方、親の期待や満足にも応えなければならないという矛盾したメッセージを与える傾向があることを指摘し、そうしたダブルバインド(二重拘束)の中で、親に直接反抗することもできず、逃げ場を失っているのではないかと危惧する黒沢(2009)の研究がある。

しかしここで原田(2008)や黒沢(2009)が言及している親子関係とは、あくまで親か子どものどちらか一方の認知に基づいた結果から言及されたものにすぎず、親子関係の実態とは隔たりがある可能性がある。また思春期の親子関係を対象とする場合、親子間で認知にズレがある可能性も大きい。よって親と子ども、双方による親子関係の認知を考慮した上で、親子関係に関する分析を行うことは十分に意義があると考えられる。よって本稿では中学生とその保護者の回答から得られたマッチングデータを使用し、子どもと親の双方の

考慮した親子関係を分析、類型化し、その親子関係の類型ごとに子どもの自己否定感や将来意識がどのように異なるかを分析する。

3 本稿で用いる重要な概念の提示

本稿では、親と子どもの親子関係に対する認知のズレを考慮した分析を行うために、親子の意思決定の在り方についての4類型を作成し、分析に用いる。

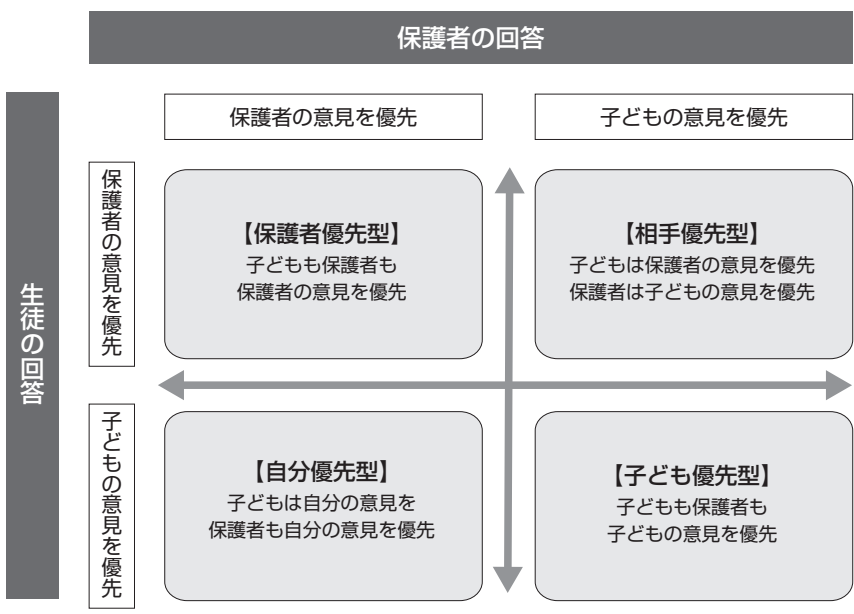
4類型の変数は、生徒票Q45E「あなたと意見が違ったとき、保護者の意見を通す」の質問に対して、「よくする」「ときどきする」と回答したものを「保護者主導」、「あまりしない」「ほとんどしない」と回答したものを「子ども主導」に分類し、次いで保護者票のQ16D「あなたと子どもで意見が違うとき、あなたの意見を優先させる」の質問に対して

「よくある」「ときどきある」と回答したものを「保護者主導」、「あまりない」「まったくない」と回答したものを「子ども主導」に分類した上で、クロス分析を行った結果、得られたものである(図1)。

4 仮説

- 理論仮説1：学力が高い子どもほど、自己否定感が低い。
- 作業仮説1：簡易学力スコアが上位の子どもほど、自分はダメな人間だと思わない。
- 理論仮説2：学力が高い子どもほど、将来に対する安定志向が弱い。
- 作業仮説2：簡易学力スコアが上位の子どもほど、つまらなくても穏やかに過ごしたいとは思わない。

図1 親子の意思決定に関する4類型



- I：子どもは保護者の意見を、保護者は子どもの意見を優先 (12.3%)
- II：子どもも保護者も保護者の意見を優先 (31.1%)
- III：子どもも保護者も自分の意見を優先 (36.3%)
- IV：子どもも保護者も子どもの意見を優先 (20.3%)

●理論仮説3：自分の意見よりも親の意見を優先する子どもは、自分の意見を優先している子どもと比べ、自己否定感が高い。

○作業仮説3：自分の意見よりも親の意見を優先する（保護者優先型・相手優先型）子どもほど、自分はダメな人間だと思う。

●理論仮説4：自分の意見よりも親の意見を優先する子どもは、自分の意見を優先している子どもと比べ、将来に対する安定志向が強い。

○作業仮説4：自分の意見よりも親の意見を優先する（保護者優先型・相手優先型）子どもほど、つまらなくても穏やかに過ごしたいと思う。

●理論仮説5：自分の意見よりも親の意見を優先する子どもは、自分の意見を優先している子どもと比べ、自己否定感が高いという傾向は、学力階層にかかわらず表れる。

○作業仮説5：自分の意見よりも親の意見を優先する（保護者優先型・相手優先型）子どもほど自分はダメな人間だと思う傾向は、簡易学力スコアにかかわらず表れる。

●理論仮説6：自分の意見よりも親の意見を優先する子どもは、自分の意見を優先している子どもと比べ、将来に対する安定志向が強いという傾向は、学力階層にかかわらず表れる。

○作業仮説6：自分の意見よりも親の意見を優先する（保護者優先型・相手優先型）子どもほどつまらなくても穏やかに過ごしたいと思う傾向は、簡易学力スコアにかかわらず表れる。

5 変数の設定

分析で使用した主な変数は、以下の通りである。

①自己否定感

Q47D「自分はダメな人間だと思う」を使

用した。「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の合計を「あてはまる」に、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の合計を「あてはまらない」とした。

②将来に対する安定志向（将来意識）

Q42F「多少つまらなくてもおだやかな一生を送りたい」を用いた。クロス表では「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計を「そう思う」に、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の合計を「そう思わない」として使用した。

③学力

Q9の1～10の項目を加算して、0～10の簡易学力スコアを設定し、その分布をみた上でできるだけ均等になるように3分割した。

④保護者の会話量得点

Q44のA～Gの「よく話す」「ときどき話す」「あまり話さない」「ほとんど話さない」を逆転リコードし、加算して7～28の会話量得点を算出した。

⑤クラス内友人

Q16A「クラスに」の回答を使用した。「いない」「1～3人」「4～6人」「7～9人」「10～12人」「13人～」をそのまま変数として扱った。

⑥経済階層

Q30「あなたの家にあるもの」の点数を加算し、スコア化したものを使用した。

6 分析結果

表1は、作業仮説1「簡易学力スコアが上位の子どもほど、自分はダメな人間だと思う」の検証結果を示したものである。学力別に結果をみたところ、学力上位>学力中位>学力下位の順で、自己否定感が低いという結果が得られた。よって作業仮説1は支持された。これらの結果から、学力は、中学生の子どもの自信に少なからず影響を与えていることがわかる。

表2は、作業仮説2「簡易学力スコアが上位の子どもほど、つまらなくても穏やかに過

表1 学力×自己否定感

| 学力 | 自己否定感 | | 合計 | N |
|--------|--------|------|-------|--------|
| | 高い | 低い | | |
| | 上位 (%) | 50.2 | | |
| 中位 (%) | 52.5 | 47.5 | 100.0 | (737) |
| 下位 (%) | 60.9 | 39.1 | 100.0 | (991) |
| 合計 (%) | 54.6 | 45.4 | 100.0 | (2807) |

0.1%水準で有意 p=0.000

表2 学力×将来に対する安定志向

| 学力 | 将来に対する安定志向 | | 合計 | N |
|--------|------------|------|-------|--------|
| | 強い | 弱い | | |
| | 上位 (%) | 54.4 | | |
| 中位 (%) | 57.9 | 42.1 | 100.0 | (736) |
| 下位 (%) | 63.2 | 36.8 | 100.0 | (997) |
| 合計 (%) | 58.4 | 41.6 | 100.0 | (2814) |

0.1%水準で有意 p=0.000

表3 意思決定の4類型×自己否定感

| 意思決定の 4類型 | 自己否定感 | | 合計 | N |
|--------------|------------|------|-------|--------|
| | 高い | 低い | | |
| | 保護者優先型 (%) | 57.8 | | |
| 自分優先型 (%) | 51.1 | 48.9 | 100.0 | (840) |
| 相手優先型 (%) | 62.6 | 37.4 | 100.0 | (286) |
| 子ども優先型 (%) | 45.8 | 54.2 | 100.0 | (469) |
| 合計 (%) | 53.5 | 46.5 | 100.0 | (2317) |

0.1%水準で有意 p=0.000

ごしたいとは思わない」の検証結果を示している。学力別の結果をみると、学力上位>学力中位>学力下位の順で将来に対する安定志向は低い。よって作業仮説2は支持された。

学力は子どもが積極的な将来像を描くかどうかといった将来意識にも影響を与えていることが読み取れる。

表3は、作業仮説3「自分の意見よりも親の意見を優先する（保護者優先型・相手優先型）子どもほど、自分はダメな人間だと思う」

を検証したものである。結果、相手優先型>保護者優先型>自分優先型>子ども優先型の順で、自己否定感が高くなる傾向が確認された。よって作業仮説3は支持された。興味深いのは相手優先型において自己否定感が最も高くなっていることである。

思春期に入り、徐々に自分の意見や価値観が芽生え始めているにもかかわらず、親の期待や意向をくみ取り、期待に応えようとしてしまう（最終的には親の期待や意向を自己目

表4 意思決定の4類型×将来に対する安定志向

Q45E, HQ16D×Q42F

| 意思決定の 4類型 | 将来に対する安定志向 | | 合計 | N |
|--------------|------------|------|-------|--------|
| | 強い | 弱い | | |
| 保護者優先型 (%) | 61.1 | 38.9 | 100.0 | (722) |
| 自分優先型 (%) | 57.6 | 42.4 | 100.0 | (840) |
| 相手優先型 (%) | 65.6 | 34.4 | 100.0 | (285) |
| 子ども優先型 (%) | 51.6 | 48.4 | 100.0 | (471) |
| 合計 (%) | 58.5 | 41.5 | 100.0 | (2318) |

1%水準で有意 p=0.001

表5 学力×意思決定の4類型×自己否定感

Q09×Q45E, HQ16D×Q47D

| 学力 | 意思決定の 4類型 | 自己否定感 | | 合計 | N |
|-------------|--------------|-------|------|-----------------|-------|
| | | 高い | 低い | | |
| 上位 | 保護者優先型 (%) | 55.4 | 44.6 | 100.0 | (307) |
| | 自分優先型 (%) | 46.9 | 53.1 | 100.0 | (324) |
| | 相手優先型 (%) | 58.8 | 41.2 | 100.0 | (114) |
| | 子ども優先型 (%) | 39.6 | 60.4 | 100.0 | (182) |
| | 合計 (%) | 49.7 | 50.3 | 100.0 | (927) |
| ガンマ係数：0.130 | | | | 1%水準で有意 p=0.001 | |
| 中位 | 保護者優先型 (%) | 59.4 | 40.6 | 100.0 | (192) |
| | 自分優先型 (%) | 44.3 | 55.7 | 100.0 | (212) |
| | 相手優先型 (%) | 57.3 | 42.7 | 100.0 | (75) |
| | 子ども優先型 (%) | 45.5 | 54.5 | 100.0 | (134) |
| | 合計 (%) | 50.9 | 49.1 | 100.0 | (613) |
| ガンマ係数：0.129 | | | | 1%水準で有意 p=0.008 | |
| 下位 | 保護者優先型 (%) | 59.5 | 40.5 | 100.0 | (222) |
| | 自分優先型 (%) | 60.5 | 39.5 | 100.0 | (301) |
| | 相手優先型 (%) | 71.9 | 28.1 | 100.0 | (96) |
| | 子ども優先型 (%) | 53.9 | 46.1 | 100.0 | (152) |
| | 合計 (%) | 60.3 | 39.7 | 100.0 | (771) |
| ガンマ係数：0.008 | | | | 5%水準で有意 p=0.046 | |

的化してしまう) 自分に対する苛立ちや歯がゆさが、自己否定感として表れているのかもしれない。

表4は、作業仮説4「自分の意見よりも親の意見を優先する(保護者優先型・相手優先型)子どもほど、つまらなくても穏やかに過ごしたいと思う」の検証結果を示している。結果、相手優先型>保護者優先型>自分優先型>子ども優先型の順で、将来に対する安定志向が強くなる傾向が確認された。よって作業仮説4も支持された。

相手優先型や保護者優先型の子どもは、自分優先型や子ども優先型の子どもに比べ、親の意見や期待に沿った意思決定を行っているため、自分の希望や感情、意見を抑制していたり、自分自身が望んでいること以上の期待を親からかけられたりする中で、精神的に疲弊し、前向きな将来を描けなくなっているのかもしれない。

表5は、作業仮説5「自分の意見よりも親の意見を優先する(保護者優先型・相手優先型)子どもほど自分はダメな人間だと思う傾

表6 学力×意思決定の4類型×将来に対する安定志向

| | | 将来に対する安定志向 | | 合計 | N |
|----|------------|-------------|------|---------|---------|
| 学力 | 意思決定の4類型 | 強い | 弱い | | |
| 上位 | 保護者優先型 (%) | 60.7 | 39.3 | 100.0 | (308) |
| | 自分優先型 (%) | 49.2 | 50.8 | 100.0 | (323) |
| | 相手優先型 (%) | 59.3 | 40.7 | 100.0 | (113) |
| | 子ども優先型 (%) | 48.4 | 51.6 | 100.0 | (184) |
| | 合計 (%) | 54.1 | 45.9 | 100.0 | (928) |
| | | ガンマ係数：0.117 | | 1%水準で有意 | p=0.007 |
| 中位 | 保護者優先型 (%) | 60.2 | 39.8 | 100.0 | (191) |
| | 自分優先型 (%) | 57.5 | 42.5 | 100.0 | (212) |
| | 相手優先型 (%) | 64.0 | 36.0 | 100.0 | (75) |
| | 子ども優先型 (%) | 53.3 | 46.7 | 100.0 | (135) |
| | 合計 (%) | 58.2 | 41.8 | 100.0 | (613) |
| | | ガンマ係数：0.054 | | 有意差なし | p=0.439 |
| 下位 | 保護者優先型 (%) | 62.2 | 37.8 | 100.0 | (222) |
| | 自分優先型 (%) | 66.9 | 33.1 | 100.0 | (302) |
| | 相手優先型 (%) | 75.0 | 25.0 | 100.0 | (96) |
| | 子ども優先型 (%) | 54.3 | 45.7 | 100.0 | (151) |
| | 合計 (%) | 64.1 | 35.9 | 100.0 | (771) |
| | | ガンマ係数：0.032 | | 1%水準で有意 | p=0.006 |

向は、簡易学力スコアにかかわらず表れる」の検証結果を示したものである。結果、学力下位層を除いた学力上位層、学力中位層では、保護者優先型、相手優先型で自己否定感が高くなる傾向が確認された。よって作業仮説5は部分的に支持された。

クロス表を見る限り、親子の意思決定の在り方は学力以上に自己否定感に強い影響を与えているようにみえるが、それらの規定力については後ほど回帰分析を行い確認する。

表6は、作業仮説6「自分の意見よりも親の意見を優先する（保護者優先型・相手優先型）子どもほどつまらなくても穏やかに過ごしたいと思う傾向は、簡易学力スコアにかかわらず表れる」の検証結果を示したものである。結果、学力上位層、学力下位層において統計的に有意となり、学力中位層では統計的に有意な差は確認されなかったが、学力上位層や学力中位層では、保護者優先型や相手優先型で、将来に対する安定志向が強くなる傾向が確認された。よって作業仮説6は部分的

に支持された。また表6をみると、表5の3重クロス表と同様、親子の意思決定の在り方は学力以上に子どもの将来に対する安定志向に強い影響を与えているようにみえる。この点についても回帰分析を行い確認する。

7 ロジスティック回帰分析

最後に自己否定感と将来に対する安定志向を従属変数としたロジスティック回帰分析を行う。すでにクロス表で確認した学力階層の影響や、経済階層、性別といった属性の影響を統制しても、親子の意思決定の在り方が子どもの自己否定感や将来に対する安定志向に与える影響がどれほど残るかを確認する。その結果は表7・表8の通りである。

表7の結果をみると、相手優先型は1%水準で、保護者優先型は5%水準で有意になっており、学力や経済階層の影響を統制しても、保護者優先型や相手優先型の親子関係の在り方が子どもの自己否定感に与える影響は確認

表7 自己否定感の規定要因（ロジスティック回帰分析）

| 独立変数 | 偏回帰係数 | オッズ比 |
|-----------------|---------|-----------|
| 男子ダミー | -0.271 | 0.762 ** |
| 経済階層 | -0.035 | 0.965 |
| 親との会話量得点 | -0.015 | 0.985 * |
| 保護者優先型ダミー | 0.219 | 1.245 * |
| 自分優先型ダミー | -0.047 | 0.954 |
| 相手優先型ダミー | 0.420 | 1.522 ** |
| 子ども優先型ダミー（基準） | — | — |
| クラス内友人数 | -0.173 | 0.841 *** |
| 簡易学カスコア | -0.055 | 0.947 ** |
| (定数) | 1.640 | 5.156 *** |
| Nagelkerke 決定係数 | 0.053 | |
| モデル適合度 | p=0.000 | |
| N | 2741 | |

注：+：p<0.10、*：p<0.05、**：p<0.01、***：p<0.001。

表8 将来に対する安定志向の規定要因（ロジスティック回帰分析）

| 独立変数 | 偏回帰係数 | オッズ比 |
|-----------------|---------|-----------|
| 男子ダミー | -0.090 | 0.914 |
| 経済階層 | -0.011 | 0.989 |
| 親との会話量得点 | 0.028 | 1.029 ** |
| 保護者優先型ダミー | 0.281 | 1.324 ** |
| 自分優先型ダミー | 0.144 | 1.155 |
| 相手優先型ダミー | 0.473 | 1.605 ** |
| 子ども優先型ダミー（基準） | — | — |
| 簡易学カスコア | -0.068 | 0.935 *** |
| (定数) | 0.190 | 1.209 |
| Nagelkerke 決定係数 | 0.023 | |
| モデル適合度 | p=0.000 | |
| N | 2756 | |

注：+：p<0.10、*：p<0.05、**：p<0.01、***：p<0.001。

された。特に相手優先型は偏回帰係数が0.420と自己否定感を高める要因として強い規定力を示しており、また基準ダミーである子ども優先型の生徒と比べても、約1.5倍の自己否定感が高くなることがわかった。

次いで表8の結果をみる。将来に対する安定志向についても、相手優先型と保護者優先型で統計的に有意な差が確認された。学力や

経済階層の影響を統制しても、保護者優先型、相手優先型の親子関係の在り方が、将来に対する安定志向を強める影響は残ることが確認された。また相手優先型で偏回帰係数が0.473と強い規定力がみられ、基準ダミーである子ども優先型との比較においては約1.6倍、安定志向が強くなる傾向が確認された。

8 結論

本稿では、思春期における親子の意思決定の在り方を4つに類型化した上で、意思決定の在り方の違いが、子どもの自己否定感や将来に対する安定志向にどのような影響を与えているかを探った。分析の結果、明らかになった知見は以下の通りである。

第1に、学力が高いほど、自己否定感は低く、将来に対する安定志向は弱いことが明らかになった。学力は子どもの自信や存在価値を高める上で、また将来に対して積極的な未来を描く上でプラスの影響を与えていることがうかがえる。

第2に、自分の意見よりも保護者の意見を優先する、相手優先型や保護者優先型の子どもにおいて自己否定感が高く、また将来に対する安定志向も高いことがわかった。そして特に、相手優先型の意思決定を行っている子どもにおいて自己否定感や安定志向が高いことが確認された。

第3に、学力層別に相手優先型や保護者優先型の親子の意思決定の在り方と自己否定感、将来の安定志向の関連をみたところ、学力下位層に比べ、学力上位層においてより強い相関が確認された。また学力や経済資本の影響を統制しても、相手優先型や保護者優先

型の意思決定の在り方が自己否定感や将来に対する安定志向を高める効果は残ることがわかった。特に相手優先型の意思決定を行っている子どもは、保護者は「子どもの自主性に任せている」と認識していても、その背後で子どもは保護者の期待や意向を汲み取り、自分の意見や欲求を抑制しながら、保護者の意見を優先する「ものわりのいい」言動をとっている可能性がある。よって相手優先型や保護者優先型に近い意思決定を行っている親子には、子どもが心の底から自分自身の意見や欲求を解放できるような場を定期的に確保したり、あるいは親子の距離間を少し変えてみることで、子どもの自信や存在価値を高めたり、将来意識の持ち方を変える上で有効かもしれない。以上、日ごろからの親子の意思決定の在り方が、子どもの自己否定感や将来意識の持ち方に与える影響について明らかにした。

なお、今回の分析は、さまざまな役割を担いながら、日々子育てに奮闘されている保護者の方々にとって、少しでも役立つような情報提供を目指し、行ったものであり、今日の子育てや親子関係の在り方を批判するものでは全くない。本稿の内容が、思春期という、発達段階の子どもとその親の関係を考える上で、1つの題材として活用していただくことができれば幸いである。

〈引用文献〉

- 土井隆義、2008、『友だち地獄——「空気を読む」世代のサバイバル——』ちくま新書。
原田正文、2008、『完璧志向が子どもをつぶす』ちくま新書。
黒沢幸子、2009、「友だち親子の光と陰」『第2回子ども生活実態基本調査』Benesse教育研究開発センター。
Marcia, L.E., 1966, 'Development and validation of ego-identity status'. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558. (=2008, 中釜洋子・野末武義他『家族心理学 家族システムの発達と臨床的援助』有斐閣ブックス).
文部科学省、2010、「平成22年度 全国学力・学習状況調査 調査結果のポイント」。
根本橋夫、2007、『なぜ自信がもてないのか——自己価値観の心理学』PHP新書。